

吉田良生・河野稠果 (編)

## 『国際人口移動の新時代』

原書房, 2006年5年, viii, 261pp. (人口学ライブラリー4)

『国際人口移動の新時代』というタイトルをもつ本書は、「人口学ライブラリー4」として刊行されたが、完成度という点からみていくつかの問題をかかえている。

第一に、本書が対象としてとりあげた空間的な範囲の問題がある。本書が人口学的とみなせる検討をおこなっている範囲としては、世界全体、アメリカ、東・東南アジア、中国、日本がある。ヨーロッパについては1章があるものの、この章は人口学的分析をおこなっているとはみなしがたい。ところで、国際人口移動を語るばあい、その目的地として、アメリカおよび東アジアとともに、ヨーロッパが世界的な重要性をもっていることは論をまたない。まして、ヨーロッパの経験が日本の移民政策に与えてきた影響の大きさを考えると、その欠落は残念である。

第二に、本書が一貫した人口学的視点を保持しているとはいいがたい。第1章では、国際人口移動の理論として五つの代表的議論が提起されているが、第2章以下をみると、一般的にこれらの理論との接合がはかられているようにはみえない。とくに、メキシコにおける農地改革・農業改革を重視する第3章、ヨーロッパにおける世論を中心的論点とする第4章、参政権や生存権の重要性を指摘する第7章などにおいてその感が深い。

第三に、日本については3章がさかかれているが、3章とも一般論的な色彩が濃く、実態的な解明が本格的になされているとはおもえない。日本についてはすでに相当の研究の蓄積が存在しており、そのなかで独自性を主張しようとするならば、人口学的分析に立脚することが求められよう。たとえば、日本から送出される人口と日本に流入する人口を比較する社会的人口移動の分析、エスニック集団別の出生力の差異、エスニック集団の地域的な人口分布などが分析を必要とする対象の一例としてあげられよう。

このような問題をかかえているとはいえ、本書には傾聴に値するいくつかの重要な論点が存在している。

とくに第1章と第5章には、人口学的分析にとってきわめて意味をもつとおもわれる問題提起がみられる。第1章は、人口転換という条件のもとで国際人口移動を理解しようとし、人口は人口転換がまだ終焉していない地域から終焉した地域へと国際移動するとされる(7ページ)。また第5章では、労働の送出国が受け入れ国へと立場を変えていくことを意味する「国際労働移動の転換」という新しい概念が主張されている。この転換は、完全雇用がほぼ達成された時期に始まるとされ、東・東南アジア各国について具体的な検討がなされている(129ページ)。さらに第5章は、出稼ぎ者がピークとなる段階を「移動のこぶ」と呼ぶ議論を紹介している(130ページ)。

また、第2章はアメリカについて、第6章は中国について、それぞれきめの細かい分析をおこなっていることを評価したい。とくに第6章では、吉林省が主要な送出地域になりはじめているとの指摘、あるいは中国人の送出規模が全般的にいついまだ小さいという指摘などは、評者にとって興味深かった。

評者は、若かったころ厚生省人口問題研究所に奉職していたことがある。そのためもあって、国際人口移動の人口学的研究の発展に心からのエールをおくりたい。

(駒井 洋/中京女子大学教授、筑波大学名誉教授)